

深い資料を紹介して下さった東京大学の吉田鎮男助教授には、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

文 献

Chao, E. C. T., E. M. Shoemaker, and B. M. Madsen (1960) : First Natural Occurrence of Coesite, *Science*, **132**, 220-221.
 Dennis, J. G., (1971) : Ries Structure, Southern Germany, A Review, 1971, *Journal of Geophysical Research*, **76**, 5394-5406.
 Engelhardt, W. v., (1972) : Impact Structure in Europe, International Geological Congress, 24th, proceeding, **15**, 90-111.
 Engelhardt, W. v., (1982) : Hypotheses of the Origin of the Ries Basin, Germany, from 1792 to 1960, *Geologische Rundschau*, **71**, 475-485.
 Engelhardt, W. v. and G. Graup (1984) : Suevite of the Ries Crater, Germany: Source Rocks and Implications for Cratering Mechanics, *Geologische Rundschau*, **73**, 447-481.
 Gentner, W., B. Kleinmann, and G. A. Wagner (1967) : New K-Ar and Fission Track Ages of Impact Glasses and Tektites,

Earth and Planetary Science Letters, **2**, 83-86.
 Grieve, R. A. F. and P. B. Rovertson (1979) : The Terrestrial Cratering Record, I. Current Stetus of Observations *Icarus*, **38**, 212-229.
 Hörz, F., R. Ostertag, and D. A. Rainey (1983) : Bunte Breccia of the Ries; Continuous Deposits of Large Impact Craters, *Review of Geophysics and Space Physics*, **21**, 1667-1725.
 Konta, J., (1971) : Shape Analysis of Moldavites and their Impact Origin, *Mineralogical Magazine*, **38**, 408-417.
 Newsom, H. E., G. Graup, D. A. Iseri, J. W. Geissman, and K. Keil (1990) : The Formation of Ries Crater, West Germany; Evidence of Atmospheric Interactions during a Larger Cratering Event, *Geological Society of America, Special Paper*, **247**, 195-206.
 Shoemaker, E. M. and E. C. T. Chao (1961) : New Evidence for the Impact Origin of the Ries Basin, Bavaria, Germany, *Journal of Geophysical Research*, **66**, 3371-3378.

SHIRAI Masaaki (1994) : Historical review of the origin of the Ries Structure.

〈受付：1993年6月7日〉

新刊紹介

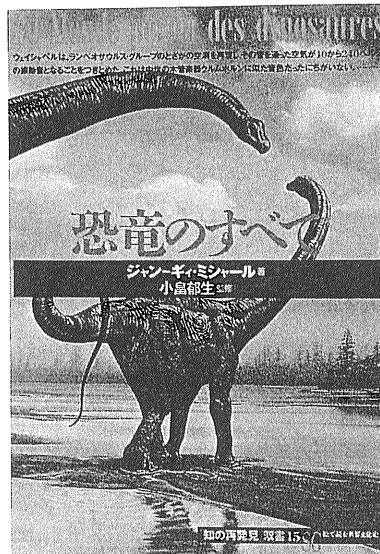
「恐竜のすべて」

ジャン＝ギョ・ミシヤール著，阪田由美子訳，
 小島郁生監修，創元社 知の再発見双書 15
 税込み1300円，1992年刊

編集委員会には、いろいろな出版社から新刊書が送られて来る。内容を見て適当と思われるものは、できるだけ紹介するようにしている。新刊と言うには遅くなってしまったが、ここに挙げた1冊も紹介したいと思う書籍である。著者はフランス国立自然史博物館(パリ)の古生物学者である。

「絵で読む世界文化史」という双書の副題にあるように、この本はまず見て楽しいという点に特徴がある。ほとんど全てのページに、イラストや写真が原書と同じサイズで掲載されており、その解説を読むだけでも楽しめる。化石の発見・研究史がさまざまなエピソードや想像図と共に紹介されているだけでなく、現在もなお研究途上にあるホットな話題がわかりやすく語られ、「知の再発見」にふさわしい内容になっている。評者を含め古生物学の専門家ではない人あるいは日頃地質学にはあまり縁の無い人に向けた本と言えるかも知れない。

この本を楽しくしているもうひとつの点は、訳の



良さにあるだろう。翻訳本に有りがちなぎくしゃくした文がなく、実に滑らかな日本語になっている。翻訳に相当の時間と労力をかけたのではなからうか。なお、後半の資料篇には、日本人研究者による解説(一部は小島(1991)「地質ニュース」442号を改稿)も加えられ、読者の理解を助けるよう工夫されている。(地質ニュース編集委員会 佐藤興平)